

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



「しんどさ」のなかでの学び

子ども教育学部 学校経営論等担当教員 森下 真実

社会人になって大学生時代を振り返ったとき、どういう「学び」を思い出すでしょう？大学生活といえば、講義、サークル、一人暮らし、アルバイト等がイメージとして浮かびますが、その中で「何かを自分たちの手で創る」ときの学びは、いつまでも自分の中に残るのではないかと思います。なぜならば、そこには「しんどさ」があるからです。

現在子ども教育学科の1・2年生は、「コミュニケーション技法」という授業（2泊3日の宿泊研修）の準備に取り組んでいます。この授業では、保育所や幼稚園、小学校で行われている野外炊飯やキャンプファイヤー等の企画・運営を行うことを通して、保育者・教育者としての考え方や動き方を実践しながら学びます。

まさに「何かを自分たちの手で創る」取り組みであるこの授業の企画立案を行う2年生に対して、われわれ教員が要求するのは「リーダーとして考え、動く」ことです。企画全体を通して何をねらうのかを練り、それを軸としながら企画を考える。先をみとおして決められた期間で実現できるように計画を立て、集団全体をみながら各企画の進捗状況を確認し、サポートをしながら計画をすすめていく。うまくいかないことがあればその理由を明らかにすると同時に改善案を考え実践する。

このような動きをすることは、「しんどさ」を伴います。それを「自分とは関係ない」と言って逃げることは簡単です。逆に「自分だけが我慢すればいい」と抱え込むのも簡単かもしれません。けれども、2年生は、(企画が)間に合わないかもしれないと不安で顔を曇らせたり、伝えたいことがうまく伝わらず怒ったり、涙をしたりしながらも、逃げずに周りとの協力をして、何とか前の方向へ進もうとしています。この「構え」は、どんな仕事をする上でも大切なものですし、「しんどさ」の中でこそ学べるものです。

私は教員として、学生がこうした「構え」を学ぶことができるよう、共に頭を悩ませながら、どういう問いを投げかければよいか、追求していきたいと思っています。「何が問題？」「どのように考えたらいいい？」「本当にそれでいいの？」そうして、こうした学生への問いかけを、自分自身へも日々問いかけています。